

## 小さなフクロウのオイレちゃん

作 レネ・マイヤー＝スクーマンツ

絵 サルバトーレ・シャツシヤ

訳 けんもち むつこ



大昔、動物も人間もまだ同じことばを話していたころのお話です。夢の山の奥の森に、小さなフクロウのオイレちゃんが住んでいました。オイレちゃんは6人兄妹の末っ子で、古い木にできた穴に最後まで残っていた子なのです。両親はオイレちゃんに、どうやって飛んだらいいのかを教えました。それから、えさのネズミの捕まえ方や、日光浴の楽しみ方も教えました。

ある日、両親はオイレちゃんに言いました。

「さあ、かわいいオイレや、勇気を出して、広い世界を見ておいで！」

「だって、わたし、まだ小さいのに大丈夫かしら？」

とオイレちゃんはたずねました。

お父さんフクロウとお母さんフクロウは口ばしを鳴らして、やさしく言いました。

「すべてをお創りになった偉大なフクロウさまが、おまえの旅をお守りくださるよ！おまえは‘きまり’をしっているね。えものを捕まえたら、すばやくしとめてやるのだよ。そうすれば、あいては痛いと思わないですむし、それにおいしく食べられるしね。どんなにかすかな光でも、すべての光を楽しんでおいで。どんなに長い旅でも、飛んで行くことで、おけいこになるからね。さあ、がんばって！」

オイレちゃんは頭をぐるりと回して、お父さん、お母さんと住んでいた木をもう一度しっかりと見つめました。ホッ、ホーとひと声鳴いてから、つばさを広げて飛び立ちました。

夢の山の奥の森は大きくて、動物がたくさんいました。オイレちゃんがしばらく飛んで行くと、あき地に岩の丘が見えてきました。

苔だらけの岩のてっぺんに止まり、沈んでいくお日さまのまぶしい光を見ながら、オイレちゃんは幸せな気持ちになりました。

オイレちゃんのいる岩は、お日さまの光で温かくなっていましたが、その下の方に、ヤマネコが寝そべっていたのです。そのヤマネコは鼻から額にかけて、四本の黒い線が入っていて、しま模様のように見えました。オイレちゃんの姿が目にとまると、ヤマネコは頭をもたげて、輪っかになったもじゃもじゃの尾っぽをぴくりと動かして、言いました。

「フクロウじゃないか！丁度よいところに来てくれた。教えておくれよ。すべてをお創りになった偉大なヤマネコさまは、人間に飼いならされてしまうようなネコをなぜお創りになったのか？」

「えっ？何ですって？」と、びっくりしたオイレちゃんは、口をあぐりあけてしまいました。

ヤマネコは話をはじめました。

「夕べ、ぼくは今まで行ったことがないほど、遠くまで行ったんだよ。夢の山から流れるあの小川のところまで。そこでぼくは、木と石でできている人間の家を見たんだ。そこら中、おいしそうなお家畜のおいがしていてね。でもぼくは、おなかが一杯だったから遠くからちょっと見ていただけだけど。家の前に人が座っていて、ネコを抱いてなでていた。ネコはかみつきもしなければ、ひっかきもしないで、のどをゴロゴロならしているんだ。ぼくはぞっとしたね。ひとに触らせるなんて！あーあ、そんなことってあるのかねえ。」

オイレちゃんは肩をすくめながら首を振り、ホッ、ホーと鳴きながら言いました。

「そんなこと、わたしわからないわ。」

すると、ヤマネコは輪っかになった尾っぽの毛を逆立てて、目をギラギラさせてどなり始めたのです。

「何だって？ おまえはフクロウじゃないか！フクロウというのはね、かしこくって世の中のわからないことには何でも答えられるものだよ！」

ビックリしたオイレちゃんは、

「そんなこと知らなかったわ」と言ってしまう。ヤマネコは、

「それでもおまえはフクロウか！恥ずかしいと思ったら出なおして来い！」  
と言って、

「フーッ」とおどかしました。

オイレちゃんはあるにとられてしまい、つばさを広げてそこから飛び去りました。輝く夕日を受けて、大きく枝を広げた木を見つけたので、下の枝に止まって、よく考えてみようと思いました。

そこへ、下の方から重たそうに羽ばたく音が聞こえてきたと思うと、オイレちゃんのとりに、クジャクが来て止まったのです。クジャクの重さで枝がゆらゆらと揺れました。

クジャクは、

「キー！こんどもうまくいったぞ！」

と言いました。

「毎晩寝る前にこの苦労だ。どうして地面を走るように、飛ぶときも楽に飛べないのかなあ。えっ、だれかそこにいる？この枝はぼくの寝ぐらだよ！」

オイレちゃんは

「ごめんなさい！」とゴロゴロ咽を鳴らしました。

クジャクは立派な羽をゆらゆらさせて、

「その声からするとフクロウだね。丁度いいところだ。」

と言い、長い尾っぽの羽をまとめて、まっすぐ下の方へたらしめてから言いました。

「ずっと気になっていた、おかしいとおもっていたことがあるんだよ。すべてをお創りになった偉大なクジャクさまは、なぜ、ぼくたちにこんな少ししか寝ぐらにする枝を下さらなかったのかなあ？」

「えっ、何のこと？」とオイレちゃんは困ってしまいました。

クジャクは話しはじめました。

「ご覧のとおり、ぼくの尾っぽの羽はこんなに長いんだ。この尾っぽの羽を立派に広げられるんだ。でも、寝る時はなかなか安心して寝られないんだ。高い木の上の方に、まっすぐ横に伸びる枝がぼくのためにあればいいんだけど。そんな枝はめったにない。」

「だって、ここにあるじゃないの？」

とオイレちゃんはつぶやいてみました。

クジャクは、

「こういう枝が3本か4本あって、選べればいいんだけどね！どうしてそうになっていないのか、教えてくれる？」と聞くのです。

「そんなこと、わたし知りません」

とオイレちゃんは答えました。

クジャクは青い羽の冠がオイレちゃんの胸の羽にさわるほど近づきました。

「知りませんか？ どうして知らないの？ フクロウというのは世の中のおかしいことになんでも答えられるものだ！」

そこでオイレちゃんは、

「わたしは、世の中におかしいことがあることも知りませんでした」と白状しました。

するとクジャクはどなったのです。

「それじゃあきみはちゃんとしたフクロウじゃないよ！ おばかさんだ！ 恥ずかしいとおもったら、さっさと飛んで行けっ！」

オイレちゃんはすっかりしょげて、そこから飛び去りました。

オイレちゃんは小さなほら穴がある岩を見つけて、そのくぼみで休けいしてよく考えてみました。

「どうして恥ずかしいと思わなければいけないの？」と、ひとりごとと言ってしまいました。

「どうして、わたしがこの世のおかしいことの答えを知っていなければいけないの？ なぜなのかしら？ すべてをお創りになったのは、偉大なフクロウさまに、どうしてヤマネコが‘すべてをお創りになった偉大なヤマネコさま’と言ったり、クジャクが‘すべてをお創りになったクジャクさま’と言えるのかしら？」

お日さまは夢の山の奥に沈みました。西の空には星がまたたき始め、木々のこずえにゆっくりとお月さまがのぼり始めました。お月さまの光はオイレちゃんのいるほら穴にも届き、その銀色の明かりに包まれて、オイレちゃんはとても幸せな気持ちになりました。

するとオイレちゃんの後ろでピーピーという声がありました。

「飛び立つ時だ！ 何と穏やかな夜！ すべてをお創りになった偉大なコウモリさまに感謝！」

オイレちゃんが頭をぐるりとまわして、見てみると、そこには岩かべにさかさまにぶらさがっているコウモリがいました。後ろ足のつま先と両方の親指で岩にしがみついて、コウモリは羽を広げ、その羽に油をさしているところでし

た。鼻の上にある穴からしみ出てくる油のようなものを舌で、すばやく全身に塗っているのです。

「あら、何んだかくさいわ」とオイレちゃんは思わず声を出しました。

コウモリがそれを認めて言いました。

「そうよ、ひどく臭うでしょう！だからわたしは、おまえさんたちのえさに向かないのよ。ところでおまえさんはフクロウじゃないの？」

オイレちゃんは答えました。

「そうよ。でもまだ小さいし、ちゃんとしたフクロウじゃないの！」

コウモリは言いました。

「えっ、フクロウはフクロウよ。それに、フクロウは、世の中のわからないことにはなんでも答えられるものでしょ？ところでおまえさんに聞きたいことがあるんだけど」

コウモリはほら穴の入り口にいたオイレちゃんの顔までちかづいて、ぶら下がって言いました。

「ほら見て、わたしはとってもうまくできていると思わない？真っ暗やみでも、えさにする‘ガ’を捕まえられるのよ。大声で‘ガ’を呼んで、こだまがかえってきたところで、飛んでいってパクリとやるの。ただ、ひとつだけ残念なことがあるの。つまり、わたしは毎年一匹しか子どもを産めないのよ。チョウチョやガはたくさんたくさん卵を産むし、ハリネズミのお母さんの後ろには、小さなハリネズミたちが長い列を作って、ちょこちょこ歩いているわ。キツネは少なくとも3匹の子ギツネを産む。すべてをお創りになった偉大なコウモリさまは、なぜわたしには、一匹の子どもしか下さらないのかしら？」

「そんなこと、わたしわかりません」

とオイレちゃんは答えました。

コウモリはびっくりして、前後にゆらゆら揺れながら、言いました。

「おまえさんがわからないなんて？わたしは信じられないわ。」

オイレちゃんは、

「わたしわからないの」

と困り果ててもう一度言いました。

コウモリは悲しそうに、言いました。

「おまえさんがわからないなら、だれがわかるというの？よく考えてみて、答えがわかったら、また、来てちょうだい。」

オイレちゃんは何度もこっくりとうなずきました。

コウモリはピー、ピーと鳴いて羽を広げて、夜のやみへと飛んで行きました。コウモリのす早く、かん高いなき声はあたりにひびきわたり、たくさんのコウモリがほら穴の奥から次々と続いて飛んで行きました。オイレちゃんは、コウモリたちが月の明かりの中を列を作って、ジグザグ、ゆらゆら、飛んで行くのを眺めていました。

オイレちゃんは困ってしまっていたはずですが、気がついてみると、とつてもおなかがすいていました。夜の間は狩りをしました。えさのネズミをいなづまみたいに、す早くしとめたのです。おなかがいっぱいになって、もう一口も入らなくなった時、オイレちゃんは地面をちよろちよろ歩いているネズミに聞いてみました。

「ねえ、そのネズミさん、教えてくださいな。どんな偉大なお方が、おまえやわたしやそのほかすべてをお創りになったのかしら？」

しばらくして地面の穴からネズミがチューと答えました。

「偉大なネズミさま以外にいないでしょ？そんなこと、物知りのおまえさんなら知らないはずはない。なぜ、そんなわかりきったことを聞くの？わたしを穴からおびきだそうというのかね？わたしたちの仲間がいなくなる時は、おまえさんたちフクロウがいつもその手でネズミを捕まえているんだよ。フクロウがどうして草をえさにするように創られていなかったのか、それさえ知っていたらねえ！」

オイレちゃんが、

「それとも麦粒をえさにするように・・・」

と答えると、

「いいえ、麦粒はわたしたちのもの」

と、とつても小さな声でネズミが返事をしかたと思うと、それっきり静かになってしまいました。

オイレちゃんはもっと先へ飛んで行って、高いこずえで休むことにしました。

「ホッ、ホッ、ホー、わたしは物知りなんかじゃないわ。わかっているのは、何も知らない、ということだけよ」

と、鳴きました。

すると、オイレちゃんのいる下の方でだみ声がしました。

「おや、そんなことないよ。おまえはヤマネコのひげ一本分ぐらいはもう知っているよ」

と、輪っかになったもじやもじやのしっぽをした、灰色のヤマネコの影がすーっと通りすぎました。

オイレちゃんはぐるりと頭を回して、あたりを見まわしましたが、  
「わたしは勉強しなくっちゃ」  
とため息をついてから、眠りこんでしまいました。

朝焼けの光が木々の葉を照らしはじめて、オイレちゃんはまた元気になり、バラ色の光に包まれて幸せな気持ちになりました。

オイレちゃんは、  
「今日はどんなものを見つけられるかしら？どんなことをやってみられるのかしら？」  
と思いました。

オイレちゃんは翼を広げて、夢の山の奥にある、朝の光につつまれた森へ、静かにす早く飛んで行きました。オイレちゃんは小川がさらさら、きらきらと流れているのを見ながら、低めに飛んでいると、あのヤマネコが言っていた人間の家を見つけました。あたりはとっても静かで、おんどりが虫をさがして地面をつついていただけでした。小川の下の方から、人間の歌声が聞こえてきました。オイレちゃんはその歌声の方へ飛んで行ってみると、そこには水を汲んでいる女の人がいました。

オイレちゃんは野イチゴのやぶに止まり、ゴロゴロ咽を鳴らして言いました。  
「きれいな声ですね。わたしよりもずっときれい。」  
その女の人は笑いながら、オイレちゃんのとまっている方を見上げて、話かけました。

「考えてもごらんなさい。すべての生きものがみんな同じようなことしかできないとしたら、この世の中はたいくつじゃありません？たとえば、あなた、飛べることは別にして、フクロウさんたちは、わたしたち人間より遠くのものも見えたり、聞こえたりするでしょ？」

そこで、オイレちゃんは、その女の人に聞きました。  
「ねえ、なぜ歌っているの？あなたはツグミのように、どこまで自分のえさ場かはっきりするために歌っているの？」  
女の人は答えました。

「わたしはね、お仕事が楽にできるように歌っているのよ。そして時々、すべてをお創りになったお母さまの栄光のために歌います。」

オイレちゃんはたずねました。

「その方はどこに住んでおられるの？」

女の人は答えました。

「どこにでもいらっしゃいます。人間の目にはその方は見えませんが、お日さまもお月さまも星たちも、そのお方の着物の飾りでしかないのです。」

オイレちゃんはそっと聞いてみました。

「もし、この小川を泳いでいる魚たちが、すべてをお創りになったのは、偉大な魚さまだとおもっている、としたら？」

女の人は答えました。

「偉大なお母さまは気を悪くなさらないはず。あのお方は創られたすべてのものをいつくしんでいらっしゃるから。」

オイレちゃんが言いました。

「その方は、あなたが栄光のために歌うのを喜びでしょうね」

女の人は答えました。

「そう願っています。わたしはそのお方にたくさんのお願いをするのです。わたしの家の屋根が長もちしますように。わたしのめんどりたちが、たくさんたくさんひなをかえしますように。わたしも子どもたちも元気でいられますように・・・」

と女の人は言いました。

そこで、オイレちゃんは聞いてみました。

「あなたは、あしたはどうなるのかと、心配しているのですか？」

女の人は答えました。

「それはだれでも心配します。今日はこれから雨が降ると思う？わたしはお洗濯ものを乾かしてしまいたいよ。」

オイレちゃんは、

「空気は雨のにおいがしないけど・・・」

と言ってから、ホッ、ホーと鳴いて、さよならをして小川の上流の方へと飛んできました。

お日さまが一日中照っていたので、オイレちゃんはたっぷり日光浴をしまし

た。そうすると、オイレちゃんはよく考えることができました。夜になってオイレちゃんは夢の山のなかほどまで飛んで来ました。暗くなると、木々の間に金色の星のように、なにか光るものが目に入りました。その光の方へ飛んで行ってみると、そこには木でできた小屋がありました。光は家の窓からもれていて、そこにはガが集まって来ていました。オイレちゃんもその光に、うっとりとしてしまいました。思い切ってどンドン近づいて、窓の細いへりまで行ってそこに止まりました。オイレちゃんはその温かな光をすっかり気に入って、フクロウの愛の歌までホッ、ホッ、ホーと口ずさんでしまいました。

「フクロウがわたしの窓のところにいる、ようこそ！」と低い声がしました。オイレちゃんが、光の向こう側にいる人間が、だれかなと目を細めて見てみると、そこにはおじいさんがいたのです。

オイレちゃんは、おじいさんにたずねました。

「何をしていますのですか？」

おじいさんは白い本のページからガを追い払いながら答えました。

「本を読んでいるのだよ。お日さまの出ている昼間は短かすぎるので、わたしはランプの明かりで本の続きを読んでいるのだよ。この本はすべてをお創りになった偉大なお父さまについての本でな。」

オイレちゃんは聞きました。

「その方はどこに住んでおられるの？」

おじいさんは答えました。

「どこにでもいらっしゃるよ。わたしがまだこの目で見ただこともない天国にも、そして人の心の中にもだよ。」

オイレちゃんが、

「おじいさんは、あしたのことをお願いするの？」と聞くと、

おじいさんが言いました。

「もちろんだよ。しかし、過ぎ去った時のこともあのお方をお願いしている。わたしの人生には、あのお方の目にかなわなかったことがたくさんあったのだ。それがわたしの心にひっかかっているね。」

オイレちゃんは小さな声で、

「ガたちはすべてをお創りになったのは、偉大なガさまだと思っていると、したら・・・」

と聞いてみました。

おじいさんは気の毒そうに笑みを浮かべながら言いました。

「いったい、偉大なお父さまのほかに、どんなお方を思い描くことができようか？」

オイレちゃんが、

「川下にいたあの女の人という偉大なお母さまは？」

と言うと、おじいさんはひたいにしわを寄せて、困ったような顔で答えました。

「あの人に、わたしはもうたくさん偉大なお父さまについて話をしたけど、おまえさんの話によると、今のところ無駄だったようだね。しかし、わたしはあの人を、いつかは正しいことをわかってくれることを願ってるよ。」

オイレちゃんは聞いてみました。

「あの人を、偉大なお父さまを‘偉大なお母さま’と呼んだら、偉大なお父さまは傷つくの？」

すると、おじいさんは長いこと考え込んでいました。

「変なことを聞くねえ。傷つかないだろうよ。偉大なお父さまは善い方だから。それより、わたしの方が、あのお方の忠実なしもべとしては、傷ついてしまいそうだね。」

「おじいさん、そのことであまり、心を重くしないでくださいね」

とオイレちゃんは言って、さよならをして、飛び去りました。

翌朝、オイレちゃんは小川に戻って来ました。今度は女の人ではなく、子どもがいたのです。子どもは小川の岸に座ってネコを抱き、水の中に足をブラブラさせて、魚をながめていました。お日さまは子どもとネコ、小川と石、そして草にもその光をふりそそいでいます。オイレちゃんはそのと木の切り株に飛び降りました。オイレちゃんの鋭い目は遠くからでもすべてがよく見えるのです。子どもがどうやってネコをなでているのか、ネコが魚のことなどすっかり忘れて、なでてもらっていること、小川の波がキラキラと輝いているのも見えました。そのすべてを見てオイレちゃんは幸せな気持ちになりました。

すべてをお創りになり、すべてにお日さまを照らしてくださる方の名前を、この子どもは知っているかしら？たぶんこの子はその名前を知らないわ。でも、この子はその方と今いっしょにいるんだわ。そのことをオイレちゃんは、はっきりと感じました。あしたもあさってもまだ来ていない。でも、それはたいしたことではない。そして、きのうとおとといもどこかへと過ぎ去ってしまった。

でも、それもたいしたことではない。

オイレちゃんは、頭をぐるりと回してからあの方からいただいたすべての名前を思い出してみました。すべてをお創りになった偉大なフクロウさまも、偉大なヤマネコさまも、偉大なクジャクさまも、偉大なコウモリさまも、偉大なネズミさまも、偉大なお母さまも、偉大なお父さまもみんな、——偉大な今もいつもいっしょにいる隠れた方——とも名づけることができる、とオイレちゃんはつぶやきました。

ネコがオイレちゃんを見上げて目くばせをして、

「もちろんだ！」

と面倒くさそうに、ニャーと鳴きました。

お日さまが沈むと、オイレちゃんは森へ帰って来ました。ネズミの穴を探し回って見つけて穴の中へ叫びました。

「あのねえー、生きているものはすべて、生きているものから命をもらうのよ！ネズミさんたちがたべる麦粒にも命があるのよ！」

もっと先へと飛んで行くと、コウモリに会って、オイレちゃんは言いました。

「上手に飛べるのね。でも、コウモリさんが赤ちゃんを何匹も抱えて飛んだら、きっと重たくて飛べないでしょ。」

「そうかもしれないわ」とコウモリはうなずきました。

オイレちゃんは、クジャクが寝ぐらにしている木の上に飛んで行って、言いました。

「クジャクさん、お気の毒さま。ニワトリと同じ仲間なのに、自分たちだけ寝ぐらにする木が欲しいだなんて、みえをはってもだめよ。」

オイレちゃんが、もっと先へ飛んで行くと、ヤマネコが大きな木の枝で待ち伏せしていました。オイレちゃんの姿を見ると、ヤマネコは目をギラギラと光らせて、フーッと言いながら、

「やあ、少しはかしこくなったかね？」と聞きました。

オイレちゃんは楽しそうに答えたのです。

「まだそんなに。だってわたし、まだ、小さくてお勉強中なのよ。そういえば、わたし、なでてもらっているネコを見たのよ。子どもに抱かれていて、小川を泳いでいる魚を、ねらおうともしないネコがいたの！」

ヤマネコはフーッと行って、どなりだしました。

「聞いたこともない、全くあきれたね！」

オイレちゃんは聞いてみました。

「もし、すべての生き物がみんな同じようなことをして、同じように感じていたら、それは、とってもたいくつなことじゃないかしら？ヤマネコさんたちの‘偉大なヤマネコさま’という隠れた方が、ネコの仲間にいるいろいろなことをさせてくださる方がすてきじゃないかしら？」

すると、ヤマネコは黙ってしまい、オイレちゃんは先へと飛んで行きました。

おしまい、オイレちゃんは、お父さんとお母さんのいるふるりの木も訪ねました。両親はよく帰って来たねと、のどをゴロゴロ鳴らしながら言いました。

「すべてをお創りになった偉大なフクロウさまは、おまえにたくさん勉強させてくださったかね？」

オイレちゃんは平和な気持ちで、答えました。

「はい。これからは、お父さん、お母さんやこの世のすべての生き物に、そのことについてお話するわ。」

おかあさんフクロウはホッツ、ホッツ、ホーと答えました。

「ええ、そうしなさい。かわいい子や。でも、人間には難しいだろうね。人間はおまえをなかなか信じてくれないかも知れないからね。」

オイレちゃんは頭をぴくんと動かしてから、高い声で叫びました。

「わたしを信じてくれる人間が見つかるまで、ずっと飛んでくわ！」